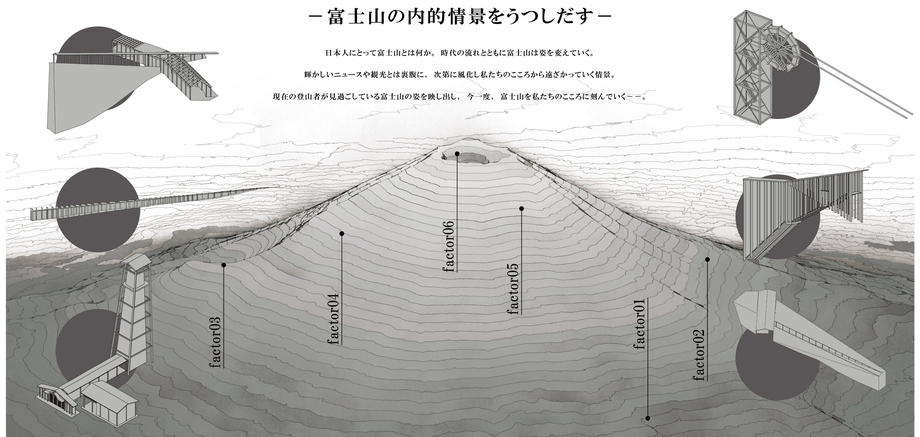
富嶽反転

－富士山の内的情景をうつしだす－

日本人にとって富士山とは何か。時代の流れとともに富士山は姿を変えていく。

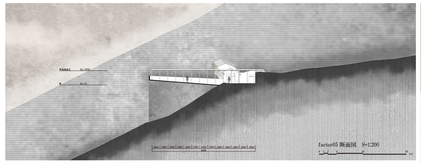
輝かしいニュースや観光とは裏腹に、次第に風化し私たちのこころから遠ざかっていく情景。

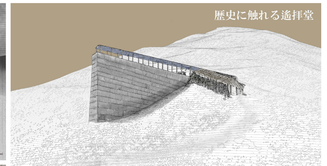
現在の登山者が見過ごしている富士山の姿を映し出し、今一度、富士山を私たちのこころに刻んでいく－－。



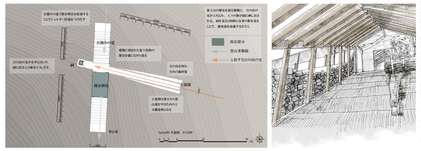
factor05 迎日堂

3560m





機能：遙拝堂、土流視、シェルター

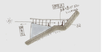


山田手前にある、廃墟となった神社に、シェルター遙と土流視を計画する。既存の建築を拡張することで、登山者を守るための道をつくりだす。

diagram：ベクトル操作―水平ベクトル

石垣など形成された遙は、富士山特有の建築文化を表している。このような遙に対して、古くは日の出を見るための重要な場所であったことから、水平方向に存在する内的情景を映し出すベクトルを掲げ、水平方向に延びる土流視を配する。既存ある遙と、新たな土木構造物が交差することで、富士山に存在する建築の歴史を感じるための道をつくりだす。　新たな視点を与える。この水平方向のベクトルによって立ち上がった土流視は日の出を待ちための遥拝堂にもなる。

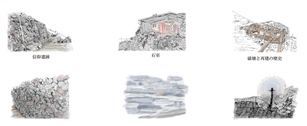
system：歴史が交じり合う建築に日の出を映し出す



Ⅰ：配置
既存の建築を拡張した遙と新たなベクトルによってうまれた流視を交差させる

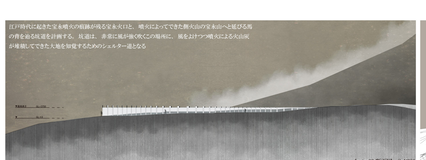
Ⅱ：新旧交差と興業遙
古くの富士山では日の出（御来光）ではなく、映し出されたお山の影（御来遙）を広に重ねていたのである。
太陽と反対方向にある祠に、日の出の水平に入る光を当てると、祠を見る人は遙因せずに身の影を持ちだろう。

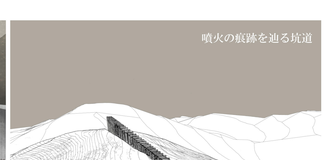
内的情景



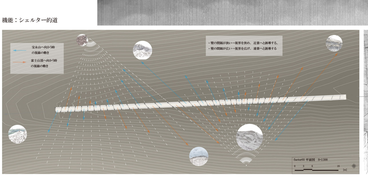
factor03 痕跡の景道

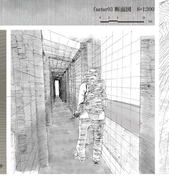
2690m



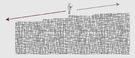


機能：シェルター的遙





diagram：ベクトル操作―逆ベクトル



宝永山に続くルートは設備が少ないため多くの人は登らず、富士登山において見過ごされている。ここでうつしだされる内的情景は、噴火によって形成された大地である。この宝永山に向かう方向は、山頂を目指すベクトルとは逆のベクトルを与えており、逆方向のベクトルは、山麓方向への視点を生み出す。

system：火口の風景を切り取る

眺められた内的情景は遙と遙前に分けられる。これらを知覚するために連続する壁によって風景を切り取り、登山者の視覚を操作する。

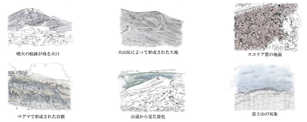
Ⅰ：地遙などの近景のポイントから放射状に遙を伸ばしていく

Ⅱ：遙に従って風景を切り取る壁を配置する。壁の間隔や角度によって、近景と遠景の視線を操作する

Ⅲ：宝永山に近づくにつれて壁が高くそして高くなることで、建築が登山者の視界から消えて消え、解放に広がる景色が開ける。

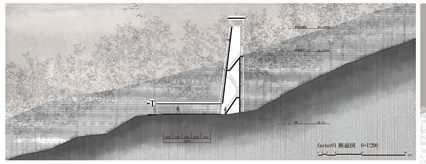
内的情景

プログラム：火口の風景を切り取る



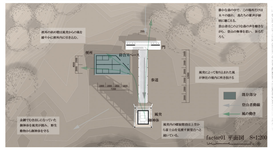
factor01 聴森社

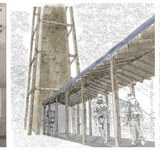
1700m



機能：神社、休憩所、展望台

富士山麓の森林部にある、廃墟となってしまった富士信仰の神社。現在はむき出しになって金網で囲われている御神体を守り、登山者が祈るための神社を再建する。





diagram：ベクトル操作―上ベクトル

ここでは山頂に向かうベクトルに対して、上方向の新しいベクトルを与え、既存の神社と御神体を守る風景を提案する。

うつしだされる内的情景は、神社や遙跡などの信仰の痕跡と、森林における自然をはじめとする動物の動きや木々を通り抜ける風である。
このような森林部における動きは地表に近い位置より もしくは、森林の上部で感じることができる。上へのベクトルはこのような上下の内的情景をうつしだす。

system：風が森の声を運ぶ

富士山のなかで静かな空間である森林の中で、森林の動き（森の声）を知覚するために風によって上下の空間をつなぐ。

・富士山の風向
偏西風の卓越で、富士山の基本的な風向は南西方向である

・この場所では山頂方向からの吹き下ろしの風が吹いている。風度はこのような風を少し上方に流すことで、登山者は風が運んできた森林上部の森の声を聞く。

内的情景

01 設計背景

01 日本人と富士山

富士山は、日本人のこころの山と言われている。
古来から多くの日本人が思いをはせ、日本人の精神の根底にある自然観や文化観が反映されてきた。また信仰の対象とされ、登拝が行われてきた長い歴史がある。
時代によって日本と富士山の関係性は変化している。現在の日本人には、報道等の社会的な変化によって形作られた、あるイメージを共有している。

02 近代と富士山

戦後以降、交通網の発達によって富士山の中腹までのアクセスが容易になると、富士山の観光地化が進み、富士登山が大衆化・レジャー化される。
富士登山は2万人の日本人にとって身近なものになる一方で、時代の流れとともに失われたものや、見過ごされている風景が存在していることに気づく。

富士山の近代化と変遷

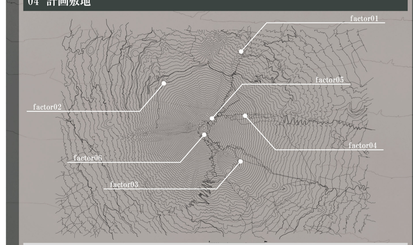
02 富士登山の現状

整備され統一化された単調な遙は、山頂を目指す登山者の目的と安全を最遙重しているが、
同時に富士山の微細な自然環境や、過去の痕跡等の内在的な要素から登山者の目を遠っているようだ。
多くの登山者の主遙は登遙経験であり、登頂しても富士山との距離感を感じる。
私はどこか、今の富士登山に違和感を感じた。

03 設計題旨

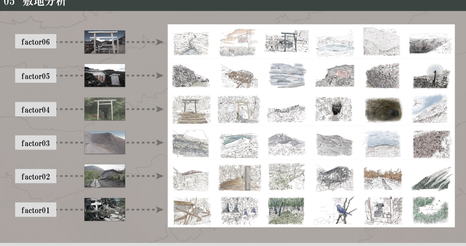
現在の富士登山者が目を向けることがなかった、新しい視点を与える。
新しい視点は、失われて見過ごされている富士山の内在的な要素を感じるための装置に活用出来るだろう。
わたしはその内在的な要素を**内的情景**とよぶ。
新しい視点から、富士山の内的情景をうつしだすことによって、
登山者のこころにそれぞれの新たな富士山像を上書きしてうえ、だすことを試みる。

04 計画敷地



現在の富士山において時代の流れとともに風化し、失われた大地や構造物。
すなわち人のすがっかなくなり廃墟となった建物や、山頂を目指すのみの富士登山において、見過ごされている大地６方向を選定する。

05 敷地分析



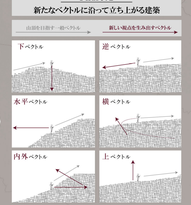
それぞれの場所でみられる**内的情景**を抽出出す。
内的情景は、登頂が主遙になっている現在の富士登山において見過ごされている富士山の自然文化、富士山に対する日本人の思いの根源となるものである。
標高差によって自然環境が大きく変化する富士山では、それぞれの場所において多様で異なる要素が存在する。**富士山はこうした様々な小さな要素の集合体なのである。**

06 形態操作

Phase01 内的要素と登山遙の2つのベクトル

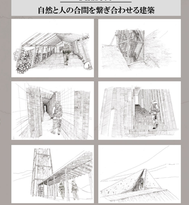
眺められたそれぞれの内的情景の位置と方向関係を、登山遙に記述していく。ここで、それぞれの内的情景に向かうベクトルが、富士登山では一般的な山頂へと向かうベクトルとは異なる方向に延びていることに気づく。

Phase02 新たなベクトルに沿って立ち上がる建築



そこで山遙を目指す一般的なベクトルに対して新しいベクトルを掲ふ。そのベクトルに沿って建築をさ立ち上げていく。
新しいベクトルは、眺められた内的情景が映し出される方向に向き、現在の登山者が見ることがない新たな視点を生み出す。

Phase03 自然と人の合間を繋ぎ合わせる建築



眺められた内的情景は、富士山における自然の要素そのものや、自然によって配生する日本人の思いの集積である。建築を自然と人の間に存在し、双方をつなぐものとして定義し、風、光、土、水などの自然要素を建築に組み込んだ上で内的情景をうつしだす。

07 富士山の構造物の分析と素材の検討

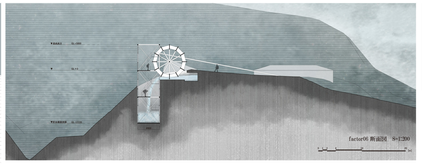
富士山における構造物の素材・構造などのリサーチを基に、6つの建築形態を決定する。

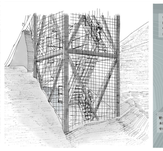
富士山における石の地、降雨量等のインプラを神社・祠などは様々な構造物が存在する。これらの建築は富士山の厳しい自然環境の中で形成された独自の形態を持つ。これらの**建築の構造・素材などのリサーチを行い、本提案での6つの建築に落とし込んでいく**ことによって、富士山という特異な自然環境の中でなおしう建築形態を決定している。

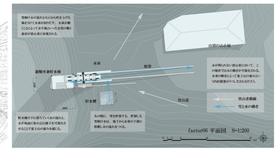
「日本人にとって富士山とは何か。」富士山の内的情景をうつしだすことで、日本人のこころにそれぞれの情景がうつしだされる。
こうして内定情景に別の意味が付加され、日本人にとって豊かな富士山の像が形成されていく。

factor 6 銀明水車

3710m







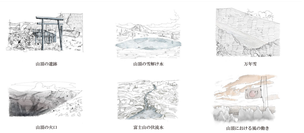
機能：井戸、貯水槽、避難所

山頂には、かつて雪解けが残きだいた井戸の跡がある。水が涸れ以降に捨てられたい富士山において、限上の万年雪や雪解けは貴重な恵みである。そん な富士山における水の恵みを知覚するための水車を練する井戸と貯水槽を計画する。

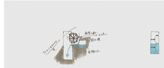
diagram：ベクトル操作―下ベクトル

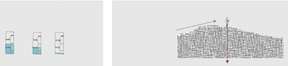
うつしだされる内的情景は富士山における水の恵みと山頂の自然要素である。山体に降る雨や雪は富士山の地面に染みふん。地表と全てで山麓部で染き出す。
下へのベクトルによって、このような富士山における水の恵みのメカニズムを可視化させる。

内的情景



system：水車の動きによって、富士山における水の恵みを知覚する





Ⅰ：水車のシステム
冬の間雪を貯留し、その雪解け水の流れと火口から吹き上げる風の動きによって水が動き出す。水車でくみ取られたお山、周辺の山小屋へ伸びた配管によって水を供給する

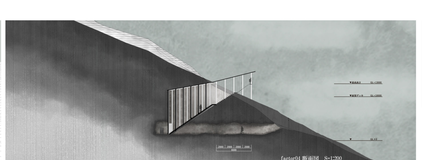
Ⅱ：避難所兼貯水槽
レベルごとに階層空間を設け、雪解け水の残滓によって上下に変化する水位によって空間がつくりだされる。

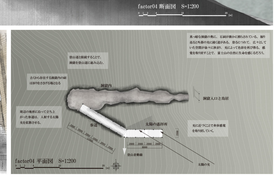
diagram：ベクトル操作―下ベクトル

うつしだされる内的情景は富士山における水の恵みと山頂の自然要素である。山体に降る雨や雪は富士山の地面に染みふん。地表と全てで山麓部で染き出す。
下へのベクトルによって、このような富士山における水の恵みのメカニズムを可視化させる。

factor04 再生の洞窟

2700m

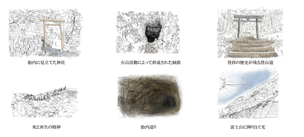




機能：参道、登山道、神社

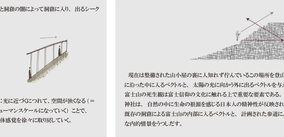
富士山は火山活動によって形成された洞窟が多い。富士信仰ではそこに入ることで「死と再生」を意味している。計画地はこのような洞窟とそこにある神社である。

内的情景



system：光と感覚の操作により「死と再生」の空間をつくりだす

感覚が途切ることで「死」と解釈し、富士山に神性を見た洞窟の間によって洞窟に入り、出るシークエンスによって、身体感覚を取り戻す



Ⅰ：地中から太陽へと続ける参道は、地形に沿って曲がれ、入射する光を拡散させて、洞窟内にエナルなを植ける

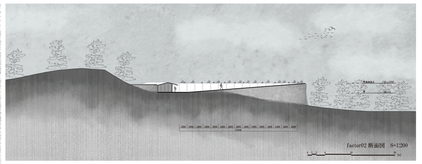
Ⅱ：光に近づくにつれて、空間が狭くなる（＝ヒューマンスケールになっていく）ことで、身体感覚を立ち取り戻していく。

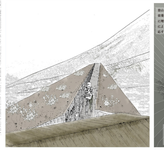
diagram：ベクトル操作―内外ベクトル

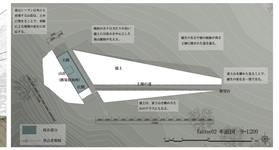
現在は整備された山小屋の裏に入口がすけんていることの場所を登山道に組み込んでいこうと、洞窟に近づいたものに入るベクトルと、太陽の光に向かう外に出るベクトルを与える。
富士山の死生観は富士信仰の文化に触れることで重要な要素である。修験道の洞窟は、自然の中にうまの洞窟を感じ石は本人の精神性が反映されている。
既存の洞窟による富士山の内部に入るベクトルと、計画された参道による外に出るベクトルは、このような内的情景をつくしだす。

factor02 植生の山荘

2300m



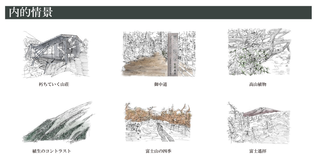




機能：山荘（簡易宿泊所）、展望台

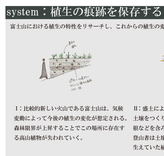
富士山の森林限界に位置する、御中道と呼ばれる富士山の中腹を一周するかつての ルートに存在する、御殿という高山植物がみられる場所がある。
この場所は登山シーズンは夏のみ利用できる高地地点である。現在は失われた山荘の跡に、通年利用できる簡易宿泊所としての山荘を計画する。

内的情景



system：植生の痕跡を保存する

富士山における植生の特性をリサーチし、これらの植生の変化を痕跡として象徴していく。



Ⅰ：比較的新しい火山である富士山は、気候変動によって少後の植生の変化が想定される。森林限界は上昇することでこの場所に存在する高山植物が失われていく。

Ⅱ：盛土によって、高山植物が生えるための土壌をつくり出す。土壌は植生の要の化石や粉土を含み、植物の種子が集積されていく。登山者は土壌の遙通をこなることで、この場所に生えていた植生の痕跡を知覚する。

diagram：ベクトル操作―横ベクトル

御中道の縦線方向のベクトルが与えられ、富士山に対して横からの視点を生み出す。
うつしだされる内的情景は、御中道に存在する、四季によって変化する富士山の山麓植生である。富士山は標高によって植生が変化する。標からの視点は富士山の標高差によって、富士山の山麓部の植生が重点分布する部分の二面性という内的情景をうつしだす。

factor01 聴森社

1700m

機能：神社、休憩所、展望台

富士山麓の森林部にある、廃墟となってしまった富士信仰の神社。現在はむき出しになって金網で囲われている御神体を守り、登山者が祈るための神社を再建する。

diagram：ベクトル操作―上ベクトル

ここでは山頂に向かうベクトルに対して、上方向の新しいベクトルを与え、既存の神社と御神体を守る風景を提案する。

うつしだされる内的情景は、神社や遙跡などの信仰の痕跡と、森林における自をはじめとする動物の動きや木々を通り抜ける風である。
このような森林部における動きは地表に近い位山遙よりもしかし、森林の上部で感じることができる。上へのベクトルはこのような上下の内的情景をうつしだす。

system：風が森の声を運ぶ

富士山のなかで静かな空間である森林の中で、森林の動き（森の声）を知覚するために風によって上下の空間をつなぐ。

・富士山の風向
偏西風の卓越で、富士山の基本的な風向は南西方向である

・この場所では山頂方向からの吹き下ろしの風が吹いている。風度はこのような風を少し上方に流すことで、登山者は風が運んできた森林上部の森の声を聞く。

内的情景